

第26回アジア陸上競技選手権大会（クミアジア選手権2025）帯同報告

金子 晴香¹⁾²⁾ 鎌田 浩史¹⁾³⁾

1) 公益財団法人日本陸上競技連盟 医事委員会 2) 順天堂大学医学部整形外科学講座

3) 筑波大学 医学医療系 整形外科

【はじめに】

第26回アジア陸上競技選手権大会（クミアジア選手権2025）は、東京2025世界陸上の出場枠を獲得するためにも重要な大会である。そのため、大人数の選手団で臨んだ。本レポートでは、本大会のメディカルサポートについて報告する。

【選手団および大会の概要】

クミアジア選手権2025は2025年5月27日～31日に韓国・クミで開催された。

選手団は選手66名（男子33名、女子33名）、監督・コーチ・スタッフ30名の総勢96名であった。クミアジア選手権2025は、メディカルサポートとしては医師2名、トレーナー4名が帯同した（図1）。

【渡航前準備】

これまでの大会と同様にメディカルアンケートを行った。これまでの遠征の有無や既往歴、内服薬や

使用サプリメント、感染症の予防接種歴等の確認をした。大会側より麻疹の接種推奨の連絡が1ヵ月前に届いた。1ヵ月前であると接種後有効期までの期間や、現在のワクチン不足により麻疹ワクチンの接種を連絡後に行うことは困難であった。メディカルアンケートでは、麻疹ワクチンを接種していると答えた人は55%であり、接種していない人は6%であった。日本陸上競技連盟では麻疹ワクチンを海外渡航前に推奨しており、今後もこのような大会側からの連絡に備えて、海外渡航の基本ワクチンの接種の推奨と今回のアンケートでもわからないと40%程度回答しており、母子手帳などを確認するなどして、幼少期の接種について確認する方法も選手に周知していきたい。

大会前のオンラインによるミーティングでは、外傷・障害・疾病に関する対応や感染対策、アンチ・ドーピングについて情報共有を行った。

準備した医療品はこれまでの大会で用意しているOTC薬品や治療機材に加え、診断能のある機器として、運動器用超音波診断装置を持参した。

【渡航および現地の状況】

渡航は韓国であり、飛行時間は短かったが、バスでの移動や待ち時間の関係で近隣国であるが、移動時間は長く感じた。現地のホテルの衛生面は問題なかったが、到着当初は氷の入手に難渋した。食事はバイキング形式で、アジアの多国籍料理と韓国料理が中心であり、日本人にとって食べやすかった（図2）。現地の気温は日中25-30℃程度であり、日本と変わらなかった。テントが倒れる等のひどい雷雨があり（図3）、試合の中断や翌日への延期等があった。突然の天候変化に選手待機場所や補食の準備等にメディカルとコーチが協力して行ったが、タオルや補食等不足もあった。今後は天候に備え、さらな



図1：メディカルスタッフ



図2：選手村バイキングの様子

る準備が必要である。

【メディカルサポート】

ホテルには部屋1室にトレーナールームを設置し、そこでドクターの診察や飲料水・補食の配布も行った(図4)。

外傷・障害について、5名が試合前からの障害を抱えていたが、出場可能であった。内科的投薬は睡眠障害2名、乗り物酔い予防1名、アレルギー1名、腹部症状1名に行った。胸部症状1名に対し診察を行った。大会中の軽微な創部処置が1件あった。大会中の大きな外傷は2件であり、1件は転倒による頸椎捻挫、脳震盪が生じ、試合途中での欠場となった。2件目は、競技中の転落による右舟状骨骨折および月状骨周囲脱臼、左橈骨遠位端骨折であり、翌日に日本に帰国し、日本の病院で緊急手術となった。両事例とも大会側の救護の体制が確立されておらず、チーム医師がFOP内に入って対応するなど混乱を生じた。

大会後調査に回答した選手のパフォーマンス達成度の平均は74%であった。回答選手の16%が「この大会に影響していたけがや体調などの健康上の問題はパフォーマンスに50%以上影響あった。」と回答した。重要な位置づけの大会であっても、けがや体調不良がパフォーマンスの低下に影響しており、メディカルとしてはさらなる早期介入や予防が重要であると思われた。



図3：雷雨後のサブトラックの様子



図4：トレーナールーム

【アンチ・ドーピング対策】

選手のサプリメント使用に関しては医事委員のスポーツファーマシストによるサプリメントの確認を行い、第三者機関の認証の有無によりサプリメントをAからDの4段階に分け、その結果を選手に連絡した。77%の選手がサプリメントを使用していた。83%のサプリメントがAかB判定で「アンチ・ドーピング違反物が有無に関する何らかの認証がなされているサプリメント」であった。

ドーピングコントロールのある試合では、大会参加前にアンチ・ドーピングに関する教育を受けてから参加することが求められている。本大会参加前、事前ミーティングでオンラインでアンチ・ドーピング講習を行った。試合時のドーピング検査は10名に行なわれた。

【まとめ】

大会中、外傷やドーピング検査対応、トレーナーによるケア対応などが複数同時発生したり、天候の急変による試合中断などの不測の事態も起こった。メディカルチームとして、上記の事例は時に起こる事態であるため、今後はさらに、前もって予想し、チーム内の情報共有の改善や物品の事前準備できるようにしたい。

最後に、遠征中、一緒に活動したトレーナーおよび日本からサポートいただいた医事委員のメンバー、事務局の方々に感謝する。